

ゲリラとしての森林学

小島 克己

(こじま かつみ、東京大学アジア生物資源環境研究センター)

およそ独立した学問分野であれば独自の的方法論がある。林学という学問分野は、林業・森林管理のための学問分野として、明治期にドイツなどから方法を移入しながら確立された確固とした方法論に基づいていた。古い方法にいつまでも依らずに、新しい方法を検証しつつ進んで取り入れていくことが学問分野の進歩に必要である。しかし、林学が森林学になったときに方法論の検証は行われたのだろうか？単に林業学と勘違いされないように林学という名前を捨てた、のではないと言えるのだろうか？名前を変えたことで安心し、本来の学問分野の進歩、発展のための新しい方法の導入やそれを森林学として総合化、体系化してゆく試みを怠ってはいないだろうか？つまり、森林学的方法論はあるのだろうか？

10年以上前、東京大学農学部林学科の若手教員（当時）が集まって、林学科（既に林学科ではなかったかもしれない）の教育改革のために、林学を構成する各分野の方法について話し合ったことがある。この時に、このフォーラムの企画責任者でもある井上真さんが、森林社会学は総合格闘技である、と言っていたのが印象に残っている。もちろん彼は、森林社会学者はタフでなければならないと言っていたのではなく、様々な方法を駆使し、総合化し、研究成果を得る学問分野が森林社会学であると言っていたのだと思う。この話し合いの結果がどのようにまとめられたのか、どのような改革につながったのか、当時の資料が見つからず確認できないのが残念だが、「林学は、森林に関する総合的、学際的な研究を行う学問分野である」という共通理解に至ったのだろうと思う。

私は東京大学文学部宗教学宗教史学科を卒業している。宗教学は、哲学、社会学、心理学、人類学、民俗学、歴史学、考古学など多様な方法を用いて宗教現象を研究する学問分野なのであるが、これを宗教に関する学際的な研究を行う分野と言うこともできる。つまり、宗教学も林学と同様、多様な方法を含みながら、(宗教や森林といった)対象によって規定される性質が強い学問分野であると言える。「学際」については多様な方法と言うことで良いかもしれないが、「総合」についてはどうだろう。宗教学も林学も関連諸学の方法を援用しつつ対象に応じた独自の的方法論を構築してきた。社会学と宗教社会学の方法は異なる（これについてこ

こで述べる紙面がない)。社会学者による森林地域の社会研究と林学者による森林地域の社会研究は異なるし、植物学者による樹木生理学研究と林



Melaleuca cajuputi 人工林の現存量（葉むしり）調査（一番右が筆者。2010年3月、タイ・ナコンシタマラート県）

学者による樹木生理学研究は異なるはずである。林学がこのように独自の的方法論を持った総合科学であるのは、個々の林学者が林学を構成する他分野の方法を理解し、またそれを自らの専門分野でも使うことができるからであろう。生半可かもしれないが、林学もいわば総合格闘技であった。

宗教学研究室の恩師である柳川啓一教授は、宗教学はゲリラであると言った。「他の学問があまり手を付けていない領域に、別にこれが宗教学と名のりもあげず、忍び込んだ上での奇襲攻撃が、われわれの本領ではなかったか。」「戦場に長く留まっていけない。社会学とか心理学とか其の他何々学という正規軍が到着して、(中略)うるさいことを言い出したらさっさと引き上げるべきである。何よりもわれわれの目標は、宗教に対する興味であって、一定の収穫があればそれで足りる。」(柳川 1987) われわれは古い林学の枠組みにとどまり、新しい方法の導入や総合化を怠ってきた。その反省が林学から森林学への転換であるならば、森林学は正規軍であることをやめ、ゲリラとして生きていこう。生半可でも良いから、一人一人が複数の方法を使いこなし、それぞれが新たな方法論を確立しよう。それぞれが他分野を理解する姿勢や力を失っていないければ、それらのいくつかが基礎となり、森林学の総合化ができるかもしれない。

(専門：造林学、樹木生理学)

参考文献

柳川啓一(1987) 異説 宗教学序論。(祭りと儀礼の宗教学。筑摩書房, pp.301) . 3-11.